

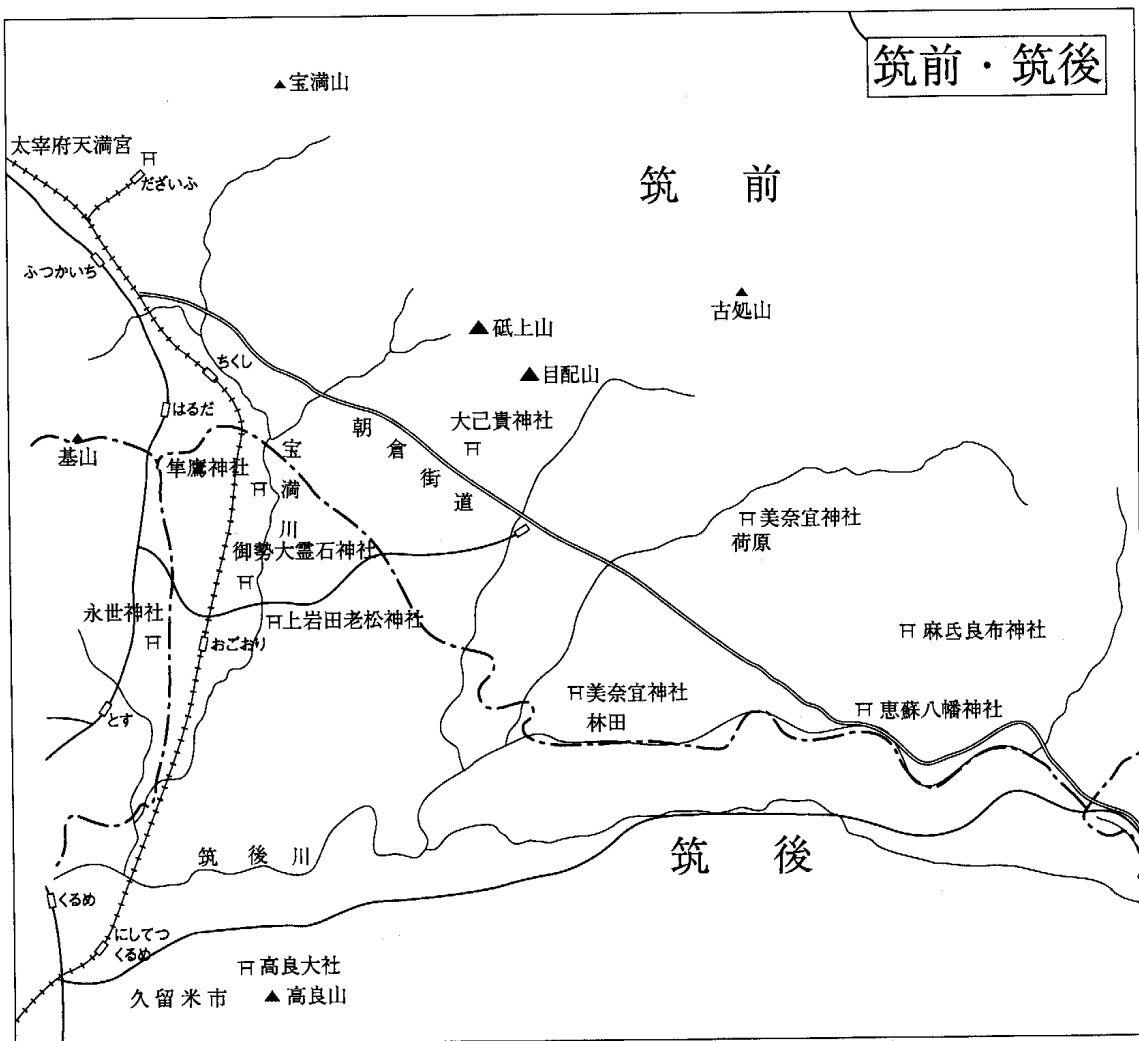
# 神功皇后伝承——筑前・筑後の境界周辺地域を中心として——

吉田修作

## 序

神功皇后は、古事記、日本書紀、風土記などに記された古代の神話的な人物だが、神功皇后に関する伝承は、中世・近世においても、特に北部九州の各地で語り継がれ、信仰の対象ともされていた。記紀によれば、神功皇后は筑紫香椎を根拠として新羅に出兵し、帰還後、宇美で御子（応神天皇）を出産したなどとされ、それらの伝承地が香椎宮（平安朝は香椎廟）、宇美八幡宮など、筑前各地に点在することは、従来から既に調査研究がなされている。従って、本稿では、それら筑前の主要な神功皇后伝承地を除き、筑前・筑後、更には肥前の境界周辺に残存する神功皇后伝承を取り上げて、それらの地域の古代と関わる中世・近世の信仰、更には近代の思想宗教観の一端を考えていきたい。以下本稿で取り上げる主な地域や神社の位置関係は次の地図参照のこと。

筑前・筑後



## 一、神功皇后と景行天皇

神功皇后（仲哀天皇）と景行天皇とは、熊襲<sup>くまそ</sup>や土蜘蛛征討のために九州各地を巡行したという点において通ずる伝承を持つ。熊襲一族に関しては、隼人との関わりという点について、歴史的、地域的側面において議論があるが、それらは実態的な問題というよりも、伝承的、或いは神話的に位置付けることが肝要である。熊襲の呼称は、記紀神話の国生みの箇所、筑紫嶋（九州全体）の中の一国名として見える他は、景行天皇（ヤマトタケルを含む）と仲哀天皇・神功皇后の代に限られるという特徴を有する。景行天皇、仲哀天皇、神功皇后ともに歴史的事実とは言えない伝承的、神話的天皇、皇后であるゆえに、熊襲という呼称も、それらの時代に特異な歴史的事実に還元し得ないものと捉えるべきである。また、土蜘蛛という賊の呼称も、日本書紀、豊後風土記、肥前風土記などに散見するが、その殆どは景行天皇、神功皇后に集中する。尚、常陸風土記、神武紀に一例ずつ土蜘蛛の用例は見出せる。<sup>(2)</sup>

景行天皇と神功皇后の九州巡行伝承は、地域的にほぼ重なることがないように設定されている。景行天皇は日本書紀と豊後風土記、肥前風土記での伝承にかなり重複が見られ、豊後地域は記紀の神功皇后伝承とは無縁であるから除外するとして、筑紫地域での景行天皇と神功皇后伝承を対比してみる。

景行天皇紀一八年七月条には次のように記されている。天皇が筑後国御木<sup>みき</sup>の高田行宮に巡行した時、大きな倒木があり、倒れる以前はその影が肥前杵島山、肥の国阿蘇山にまで至るといふ大木であったといふので、天皇がそれを神木とし、その国を御木国<sup>みきの</sup>と名付けた。続いて天皇は八女県<sup>あがた</sup>に至り、水沼<sup>みなま</sup>県主猿大海<sup>おおもみ</sup>が山中に八女津媛<sup>やめつひめ</sup>がいるといふので、八女国名の起源となった。次に天皇は的邑<sup>いくは</sup>に至って食事をされた時、膳夫<sup>かひせら</sup>等が盞<sup>うき</sup>を忘れた、筑紫の俗語で盞を浮羽<sup>うき</sup>といつたので、その地を浮羽と名付けたというように、それぞれ地名起源説話として語られている。

右の景行天皇の巡行路は、現在の福岡県大牟田市三池、八女市、うきは市に相当する筑後、筑前に跨る地域で、後述する神功皇后の巡行路においての夜須郡（現筑前町）、山門郡（現瀬高町）などと近接している。

一方、肥前風土記によれば、景行天皇は筑紫国御井郡高羅の行宮を発して巡行した際に、霧が基肆きの山を覆ったので、天皇が霧の国と発話したことから基肆の郡名が命名されたという。続いて、高羅の行宮から酒殿の泉の辺で土地の神に食事を献じた時、鎧が光り輝いたので占ったところ、土地の神が鎧を所望していることが判じられ、鎧を永き世の財とするように土地の神社に奉納した。それにより永世の社と名付けたが、後の世の人が長岡の社と改名したと伝える。右の高羅の行宮は現福岡県久留米市高良山、酒殿の泉は佐賀県鳥栖市酒井、永世の社は同鳥栖市永吉の永世神社、別称奈良田八幡宮に比定されている。永世神社に関して、肥前風土記纂註には、永保三年（一〇八三）宇佐八幡宮の分霊を併せ祀ったとあり、日本歴史地名大系ではその時期を宇佐八幡宮弥勒寺喜多院の荘園であった頃と推定している。<sup>3</sup>別に延宝九年（一六八一）に記された奈良田八幡宮縁起によれば、永保三年山城国石清水八幡宮からの勧請と伝える。いずれにせよ、平安末から中世にかけて、永世神社が八幡信仰の影響下に入り、現在でも八幡大神が祭神の一つとなり、肥前風土記の景行天皇は祭神には数えられていない。

一般的に景行天皇は地名や神社の由来に関して語られることはあっても神社の祭神として祀られることは殆どないと言つてよい。つまり、景行天皇は記紀、風土記にはその事績が記されるものの、祭神になることはなく、景行天皇の事跡に取って代わって祭神になるのは八幡大神とその母としての神功皇后が多い。これは、平安朝から中世における古代の天皇や神に対する信仰の変容である。

## 二、筑後一の宮高良大社と八幡信仰

前述の肥前風土記で景行天皇の行宮とされた高羅は、後の資料では高良と表記し、延喜式神名帳には筑後三井郡三座の一つに高良玉垂命神社が見える。高良の訓読は延喜式九条家本にカワラ、十卷本伊呂波字類抄伴信友校本にカハラ、高良玉垂宮神秘書にカウラと記され、現在はコウラと読む。肥前風土記以外の古代の文献には見られず、平安朝に至り、日本紀略延暦一四年（七九五）五月六日条に高良神、同書弘仁九年（八一八）十一月一六日条に、御井郡高良玉垂命神の名が記載されている。祭神の高良神（高良玉垂命神）に関して、水沼君祖先説、筑紫君祖先説、物部氏神説、武内宿禰説、藤大臣説などの諸説があるが、久留米市史では、高良の古訓カワラから、高良神が水や川、海などの航行に関する神と想定している。<sup>(5)</sup> その点で言えば、祖先説の中では水沼君祖先説が浮上するが、それ以上は文献的確定に乏しい。その他の武内宿禰は神功皇后の神がかりなどの場面で活躍したと伝える伝説的大臣だが、高良との関わりは見当たらない。

それに対し、藤大臣は架空名ではあるものの、鎌倉後期に石清水八幡宮の神官によって記されたという八幡愚童訓などに、神功皇后の臣下の一人として登場する。八幡愚童訓などによれば、神功皇后が三韓出兵に赴く際に、月神が現れ、それが高良大明神で別名を藤大臣連保と称し、大將軍住吉大明神とともに副將軍として皇后を補佐したという。記紀の神功皇后新羅出兵においては、天照大神や住吉神などの加護を得てその成果が収められたとされるが、中世の八幡愚童訓では、住吉大明神以下、高良大明神、安曇の磯良など北部九州地域の神々が協力してことを成し遂げたというように記されている。これは実態的には、北部九州で信仰されていた神々が八幡信仰の傘下に入ったことを示している。高良神の場合で言えば、当初は宇佐八幡宮の信仰圏に入っていたようだが、後に山城石清水

八幡宮の撰社に加わったことが、寛元四年（一二四七）の後嵯峨院石清水八幡宮行幸に際し、高良神に奉幣が行われたことから分かる。或いは、有名な徒然草五二段で、仁和寺にある法師が石清水に参拝しようとしてその麓の高良社などのみ参ったというのも、高良社が石清水八幡宮の撰社であったことを裏付けている。これらは山城の高良社だが、筑後高良社においても、八幡愚童訓を基に南北朝以前成立とされる高良玉垂宮縁起に、高良神である藤大臣を中心に記述されたことが石清水八幡宮との関係を端的に物語っている。

そして、中世以降、高良玉垂宮（高良大社）は、筑後一の宮として筑後は基より有明海沿岸に信仰圏を拡大し、三潞郡大善寺玉垂宮、三池郡黒埼玉垂宮、山門郡鷹尾社（現柳川市）などと本社末社関係で結ばれていた。<sup>6</sup>鷹尾社は瀬高下庄鎮守で高良別宮とも称するが、その地域は日本書紀では神功皇后巡行地でもあった。大善寺玉垂宮で一月七日の夜行われる火祭り鬼夜の由来によれば、異国から攻めて来た沈輪という鬼神を退治したことを起源とする<sup>7</sup>と伝えるが、これは鬼神の名に小異あるものの、八幡愚童訓を下地にしたものと思われる。このように、筑後地域の信仰は、高良山の高良玉垂宮を中心として中世以降に八幡信仰の影響下にあったことは疑いがない。

### 三、神功皇后と齐明天皇

翻って古代に戻る。神功皇后の御子応神天皇は記紀の中で神話的に語られているものの、一応実在性がかなり高いというのが歴史学の一般的な見解であるのに対し、前述したように、仲哀天皇、神功皇后は実在しない神話的な存在とする説がほぼ定着している。ただそれにしても、神功皇后は全くの架空の人物というよりも、複数のモデルを組み合わせてその伝承が生成したらしいことは言える。そのモデルの一人が邪馬台国の卑弥呼であることは、日

本書紀の神功皇后関連記事に卑弥呼について次のような記載があることから想定される。

是年、太歳己未にあり。へ魏志に云はく、「明帝の景初三年六月に、倭の女王、大夫難斗米等<sup>なんとうまいら</sup>を遣し、郡に詣り<sup>いた</sup>て、天子に詣り朝献せむことを求む。太守鄧夏<sup>とうか</sup>、吏を遣して将送り<sup>みせおく</sup>、京都に詣らしむ」といふ。〽（神功皇后紀 摂政三十九年）

尚、右の記事の景初三年は西暦二二九年に相当し、日本書紀では以下神功皇后紀四三年まで魏志倭人伝を引用するが、これらは日本書紀が架空の神功皇后の実在性を強調しようとする意図の現れである。

今一つの神功皇后のモデルとしては、北部九州に赴き、その地で崩御した三七代齐明天皇が考えられる。日本書紀によれば、齐明天皇は新羅との関係悪化により、中大兄皇子、大海人皇子兄弟らを率いて、大和から北部九州に至り、筑前朝倉宮を造営したが、その宮で崩御したと記されている。齐明天皇は万葉集にも関連する歌が記載され、日本書紀の記述がそのまま歴史的事実であるかは別として、一応実在の人物と見なされている。齐明天皇と神功皇后とは勿論差異も認められるが、朝鮮半島情勢に絡み大和から北部九州へ下ったという大枠において通じている。

次に、神功皇后紀と齐明紀の北部九州、特に筑前・筑後地域での記事を見てみる。

神功皇后は香椎から松峽宮<sup>まうを</sup>（現筑前町栗田）、御笠（現大野城市山田）、安（現筑前町夜須）、山門郡（現瀬高町）などへ移動している。それに対して齐明天皇は、娜大津<sup>な</sup>（現博多埠頭）から磐瀬行宮（現福岡市南区三宅）、朝倉橘広庭宮（現朝倉市山田、或いは同市志波）へという行程を辿っている。齐明紀によれば、朝倉社の木を切り取って宮を作った故に、神が怒って御殿を壊したという。これは土地の神の祟りに触れたことを示し、その後まもなくの天皇崩御の要因となる。齐明天皇は、日本書紀においてはその崩御の経緯についてあまりよくは描かれては、その点で、神の言葉を信じずに神の祟りを蒙り崩御した仲哀天皇と通じている。

福岡県神社誌などは、右の斉明紀の朝倉社を現朝倉市山田にある恵蘇八幡宮に比定する。<sup>(7)</sup>一方、江戸時代中期の貝原益軒の著した筑前続風土記などは、朝倉社を上座郡式内社麻氏良布神社（麻氏良布山山頂、現朝倉市志波）に比定し、現在はその説の方が有力である。ただ、恵蘇八幡宮はその麻氏良布神社の鎮座する南麓に位置し、当該二社は本来、同一社の上宮、下宮の関係であった可能性がある。筑前続風土記はその恵蘇八幡宮社家の言い伝えとして次のように記す。

齊明天皇異国に軍勢を遣し玉ふ時、祈願の為に、八幡大神を此地に勧請し給ふ。白鳳年中に、齊明天皇と天智天皇を合せ祭りて三座とす。〈第一応神天皇、第二齊明天皇、第三天智天皇〉<sup>(8)</sup>

右の伝承は古代の文献に照らすと、かなりな齟齬が認められる。その第一は齊明天皇が異国を攻めたという点で、日本書紀では齊明天皇は新羅出兵の目論見がありながらも、朝倉宮で崩御したので、実行されなかったわけだから、筑前続風土記の引く伝えは古代的には偽りで、後世の捏造の跡ということになる。但し、右の伝承の齟齬からは次のような蓋然性が導き出される。即ち、新羅出兵に至らなかった齊明天皇に対して、新羅出兵を敢行したとの新たな伝えが生成するのは、齊明天皇と神功皇后とが伝承上で結びつけられたからではないかということが考えられる。そのことは、それだけ両者が共通項を有していたことを物語る。

更に、右の筑前続風土記が古代の文献と隔たるのは、八幡大神を祭ったという点である。八幡大神は神功皇后の御子応神天皇を指すが、八幡信仰が確認されるのは奈良時代後期で、少なくとも齊明天皇の時代には八幡信仰は存在しなかった。その意味で言えば、これも後世の潤色ということになり、その時期は特定できないが、八幡信仰が応神天皇を八幡大神、神功皇后を八幡大神の聖母と崇め、各地で一般化する鎌倉期以降の可能性が強い。



#### 四、筑前朝倉郡の神功皇后伝承

朝倉郡には延喜式内社が先の麻氏良布神社の他に一社、筑前国下座郡美奈宜神社三座があり、下座は延喜式ではシモツアサクラと訓読されていた。その美奈宜神社に相当する神社には、旧下座郡（現朝倉市）林田村蟻城みなぎの旧林田神社と、同郡（現同市）荷原村寺内の旧栗尾大明神の二社が比定され、現在に至っている。両社ともに神功皇后の熊襲平定伝承をその創建の由来とするが、その基づく伝承に相違が見られる。

前者旧林田神社の由来は、筑前統風土記拾遺の所引する文安元年（一四四四）の宗像縁起によるもので、熊襲征討の際に河貝子を集めて城とし熊襲を欺き滅ぼしたので、蟻城と言った、それが林田神社付近だとする。その林田神社の創建は、新羅出兵の折、大己貴命、素盞鳴命、事代主命三神の加護を得て勝利したので、凱旋後、神功皇后摂政二年にその三神を祭る社を建てたことによるという。新羅出兵の際に事代主神などの託宣と大三輪神（大己貴神）の協力を得たことは日本書紀に記載されているが、右の他の伝承は書紀に該当する記事が見当たらない。

それに対し、後者旧栗尾大明神の由来は次の日本書紀神功皇后紀の記事を根拠とする。

且、荷持田村またのりのふれに羽白熊鷲はしろくまわしといふ者有り。其の為人強ひととなりく健たけく、亦身に翼有りて、能く飛び高く翔かける。是を以ちて、皇命に従はず、毎に人民を略盗かすむ。

成子に、皇后、熊鷲を撃たむと欲して、檀日宮かしひより松峽宮まつせに遷りたまふ。時に飄風つむじかぜたちまち忽たちまちに起りて、御笠墮風みふけおとされぬ。故、時人、其処なうを号けて御笠と曰ふ。辛卯に、層増岐野そそぎのに至り、即ち兵を挙げて羽白熊鷲を撃ち滅したまふ。左右に謂りて曰はく、「熊鷲を取り得て、我が心則ち安し」とのたまふ。故、其処やすを安と曰ふ。（神功皇后

摂政前紀）

右の記事の最後は旧夜須郡（現筑前町）の地名起源となっている。当社社伝によれば、右の記事の最初にある荷持田を古処山麓の秋月野鳥に当て、賊の羽白熊鷲はそこを本拠とし、皇后は栗尾山に陣を敷き、熊鷲を撃つたとする。その時に、天照大神、住吉大神、春日大神三神の加護により、栗尾山麓に神を招いて戦勝報告し、後の仁徳天皇が神社を勧請したのが起源だと伝える。当社の祭神三神の内、春日大神は日本書紀などに見えない地域的な神で、仁徳天皇代の神勧請というのも疑わしく、社伝は中世以降の傳承かと思われる。

式内社美奈宜神社をめぐる右の二社に関する論争は既に江戸時代から盛んで、いまだに決着がつかない<sup>(9)</sup>。ただここでは二社のいずれが正当かなどというような不毛な議論には与しない。当二社は距離的にかなり隔たっているが、荷原川、佐田川という河川によって、上流部の栗尾大明神、下流部の林田神社がつながっていることは注目される。神名帳考証に美奈宜神社を水分神と説いていることと、同水系に位置することから、美奈宜神社は、佐々木哲也が解するように、本来は下座郡一円の農耕守護神の神と想定される。また、佐々木は栗尾山頂に上宮が存在していたとの傳承を手掛かりに、延喜式に美奈宜神社三座とあるのは、栗尾山頂と前掲二社とが上宮、中宮、下宮の關係であつたと推測している<sup>(10)</sup>。更に、美奈宜神社の中宮に比定される荷原地域は、前述の上座郡式内社麻氏良布神社と後述する夜須郡式内社大己貴神社の中間に位置し、その道筋は古代の大宰府と豊後国府とをつなぐ交通路であつた点も看過できない。

このように、筑前朝倉郡では、齊明天皇の宮跡と中世以降と思われる神功皇后傳承が重層していることが明らかになった。これも齊明天皇と神功皇后の類似性によるに違いない。

## 五、筑前夜須郡の神功皇后伝承

前掲の神功皇后紀に夜須の地名起源が語られていたが、朝倉郡の西隣旧夜須郡にも神功皇后伝承が散見する。筑前統風土記によれば、栗田村に栗田八幡宮があり、住吉大神、八幡大神、神功皇后を祭り、「むかし神功皇后、羽白熊鷲と云強敵を討んとて、此所を経過し給ひし地なれば、かく此所に祝ひ祭り侍るにや」という。これは前掲の神功皇后紀を踏まえていることは明白である。尚、栗田は和名抄に見える夜須郡の郷名である。また、統風土記の記述に従えば、栗田村上宮の東の目配山上に、方一間の石があり、「里人の説に、此石に神功皇后座し玉ひ、四方を見そなはし玉ひし故、目配山と号す」という。更に、統風土記には栗田上宮の北の松尾について、「栗田は則神功皇后留り給ひし地なれば、日本紀に松峽宮にうつり玉ふとあるは、もし此地にても有へきか」と説く。

目配山の南麓には、夜須郡延喜式内社大己貴神社（現筑前町弥永）が現存し、大神大明神、大三輪神社などとも称され、地元ではオンガサマの名で親しまれている。大己貴神を祭る大和大神神社と同様、目配山（別名大神山）を御神体として遙拝する神社で、神功皇后摂政前紀では新羅出兵に協力したと伝える。

秋九月の庚午の朔己卯に、諸国に令して、船舶を集へ兵甲を練らふ。時に軍卒集ひ難し。皇后曰はく「必ず神の心ならむ」とのたまひ、則ち大三輪社を立てて、刀・矛を奉りたまふに、軍衆自づから聚る。

ほぼ同様の内容が筑前風土記逸文にも見られるが、そこでは大三輪神の崇りで兵が集らなかつたので、神を祀つたところ軍勢が召集出来たというように伝える。ここからは、神功皇后が神の意志に応じたことにより神の加護を得たことが示され、その面で、前述の仲哀天皇、斉明天皇が神の崇りを蒙り崩御したことと対照をなすものとして記述されている。

目配山の北西に位置する砥上岳の南西麓には砥上神社が鎮座するが、和名抄に見られる夜須郡中屋郷に由来して中津屋神社とも称され、神功皇后、住吉大神、八幡大神を祭る。続風土記には或いは中ツ屋権現とも称すといひ、続風土記を最終的にまとめた貝原好古が記した砥上神社縁起には、前掲の日本書紀の記事、羽白熊鷲の討伐や大三輪神社の加勢に基づきながらも、日本書紀にはない土地の伝承が加わっている。

ここにおいて、其集まりし軍衆を此砥上の地に寄宿せしめ玉ひ、是汝等が中宿なりと宣ひける。因て此辺を中屋郷と云。又、軍衆に命じて、此所にて劍戟を磨みがかせ、専軍用の謀をなさしめ玉ふ。故に砥上の号あり。

征伐勝利の御祈のために、日本最初の武神なればとて、武甕槌命を勧請して崇め祭り玉ふ。今砥上の山上に武宮とてあるは、此遺跡なり。<sup>(11)</sup>

続風土記においても、社家者の言い伝えとして、ほぼ右の縁起に即し、「神功皇后新羅を討給はんとて、先諸国の軍衆を此所まで招寄玉ひ、中やど也との玉ひし故、仲ツ屋と号す。さて軍衆に命し、此ところにして各兵器をこぎみがかせ玉ふ。故に砥上と号すとかや。」と記すが、「かかる遺跡なればとて、後世に至りて、神功皇后を祝ひ祭り奉るとなん」とそれらの伝承が古代のものではなく、後世に作られたことを見抜いている。

右の後世的伝承は江戸時代以前であったが、実は明治以降にも神功皇后伝承が語り継がれていることがある。前掲の弥永の大己貴神社には数多くの奉納絵馬が現存するが、その中に神功皇后を題材にしたものが見られる。当社の神功皇后絵馬は二幅確認されており、その一つは明治三六年作、今一つは制作年代不明である。また、三輪町史によれば、旧三輪町地域（現筑前町）には他にも神功皇后絵馬が確かめられる。依井地区のはなれ八幡（年代不明）、栗田地区の老松宮（明治九年一〇月作）、森山地区の天満宮（天保一五年八月作<sup>(12)</sup>）のもので、最後を除けば、明治期に神功皇后絵馬が新たに制作されており、それらは神功皇后伝承が時代を越えて継承されていたことを示し

ている。

このように、旧夜須郡においても、日本書紀の記述から神功皇后を祀る神社が存在するのだが、それらが後世に土地の伝承と結び付き近代にまで語り継がれているのである。

## 六、筑後小郡市大保の神功皇后伝承

旧夜須郡の南隣小郡市においても、神功皇后伝承が散見するが、その一つに宝満川中流右岸の大保龍頭たつがしよに鎮座する御勢大霊石神社がある。祭神は仲哀天皇、天照大神、八幡大神などで、延喜式神名帳の御原郡御勢大霊石社に比定され、神名帳秘積では、ミセノオホミタマシ社と訓じられる。福岡県神社誌によれば、当社に次のような伝説がある。

仲哀天皇が熊襲親征に当り、香椎の本陣より此地に軍を進め、宝満川と垢離川の合流地の大保を仮陣所とした。天皇は前戦に出て戦ったが、敵の流れ矢に当り崩御された。神功皇后は天皇の棺を香椎に移し、三韓出兵後凱旋してこの地に赴き、天皇の御形代の石を魂代とし、甲冑御衣を納め、三韓鎮撫神として祀ったという。

右の伝承は当社の独自のものだが、やや類似した内容が日本書紀に記されている。古事記、日本書紀本文では、仲哀天皇の崩御の原因を、神の託宣を聞かずにそれに従わなかったとするが、日本書紀の一云では、天皇が敵熊襲の矢に当たったためだとする。

九年春二月癸卯朔丁未に、天皇忽に痛身なやみたまふこと有りて、明日に崩かむあがります。へ時に年五二なり。即ち知りぬ、神の言を用ゐたまはずして、早に崩りましぬといふことを。一に云はく、天皇、親ら熊襲を伐たむとして、

賊の矢に中<sup>あた</sup>りて崩りますといふ。(仲哀天皇紀)

右の当社の言い伝えは日本書紀の一に云記事に基づいていることは充分考えられる。ただ、日本書紀には仲哀天皇が熊襲の矢に当って崩御した場所は記していない。では何故大保の地が戦いの場として伝承されたのか。

ここで注意されるのは、これまでの神功皇后伝承が必ずしも古代に留まらずに、中世以降に生成されたものも含まれているという点である。そこで、大保の歴史を繙いてみると、歴史上有名な中世の大保原合戦が想起される。

太平記卷三十三などに描かれた大保原合戦は、南朝正平十四年(一三五九)に征西府軍と少貳頼尚軍が筑後川沿岸から大保原にかけて戦った大会戦であったが、征西將軍懷良親王が負傷したのを見て奮い立った菊池武光の勇猛な戦い<sup>(13)</sup>が知られている。大保にある御勢大靈石神社の伝承で、仲哀天皇が戦いの中で流れ矢に当たったというのは、中世の大保原合戦の印象と重層したのではないか。古代と中世の伝承が重層していくという例は、八幡信仰の中に端的に見られる。

前述したように、八幡信仰は奈良時代後期から平安初期にかけて、九州北部において応神天皇を八幡大神、神功皇后を八幡大神の母(聖母)として祀るといふ神觀念を基盤として生成したが、中世の元寇という対外的戦いの中で飛躍的に各地に広まった。八幡信仰の文献として知られる八幡愚童訓は、既述したように、元寇を契機として、石清水八幡宮の神官によって記されたものとされるが、その中には、日本書紀を基にした神功皇后の新羅出兵と中世の元寇が重なり合いながら語られていく。

異国襲来ヲ算レバ、人王第九開化天皇四十八年二十万三千人、仲哀天皇ノ御宇二十万三千人、神功皇后ノ御代二三万八千五百人、応神天皇ノ御宇二二五万人、(中略)文永・弘安ノ御宇ニ至マデ、已上十一箇度競来ト云ヘドモ、皆被追帰、多ハ滅亡セリ。<sup>(14)</sup>

右は八幡愚童訓甲本の初めの部分で、異国襲来を神話的に記述しつつ、文永・弘安の元寇に至るまでを列挙し、神功皇后新羅出兵などと元寇が一連の流れにあることを示そうとしている。これらから考えると、先の御勢大靈石神社の伝承が、古代と中世に跨っていたとしても決して不自然ではないということになる。因みに、現小郡市北部を中心にした一帯は、中世においては筑後国御原郡で、石清水文書によると、寛正七年（一四六六）の記事に山城石清水八幡宮領とあり、大保を含めた地域が石清水八幡宮の影響下にあったことが確認される。御勢大靈石神社の伝承もそのような八幡信仰を背景に持つことが想定される。

## 七、筑後小郡市の他の地域における神功皇后伝承

小郡市横隈地区の隼鷹神社は、御勢大靈石神社と同様、宝満川沿いに鎮座するが、当社の縁起にも神功皇后伝承が伝えられている。

夫レ当社ノ祭神ハ高皇産靈神ニシテ、人皇第十四代仲足（足仲）彦天皇熊襲御親征ノ軍ヲ起シ、筑紫ニ下リ給ヒ軍中ニ薨ゼラレルルヤ、神功皇后帝二代リテ武内大臣ニ詔シテ天神地祇ヲ祀リ給ヒシ時、高皇産靈ハ御神託アリテ御姿鷹ト成レ給ヒ北ニ飛去坐シテ松ノ梢ニ止リ給フ、仍テ詔シテ其所ニ尊ノ神靈ヲ崇メ祀ラセ、鷹ノ姿ニ現レ給ヒシニヨリ隼鷹天神ト称ヘ奉ル、之則チ横隈邑ノ今之宮地ナリ、古ノ松ハ朽チテ松ノ跡ニ現今ハ楠アリ、御神体ハ鷹ヲ安置シ奉ル<sup>(15)</sup>。

右の縁起は他に見られないものだが、仲哀天皇崩御後のことで、前掲の御勢大靈石神社の縁起とも関わるものであると思われる。宇佐八幡宮周辺の伝承に神が鷹と化して現れたとの次のような言い伝えもあるから、それらとつ

ながりがあるとも考えられる。

次は鷹居。豊前国宇佐郡。同じ時の神託に、其より鷹居に至ると云々。次は郡瀬。同じ時の神託に、其より郡瀬に至ると云々。此の両所には、宇佐郡の大河有り。鷹と化り瀬を渡り、東岸の松に居る。又空に飛び、西岸の地に遊ぶ。故に鷹居瀬社と云ふ。斯の鷹は是れ大御神の変なり。大神朝臣比義これを祈り顕し奉り、祠を立て祭りを致すなり。(八幡宇佐宮御託宣集)<sup>(16)</sup>

八幡宇佐宮御託宣集は鎌倉後期に宇佐八幡宮の神官によって編纂されたものである。<sup>(17)</sup> 右の記事は、八幡大神が鷹と化し、それを宇佐八幡宮の神官の始祖とされる大神比義なる者が祭ったという件で、鷹が神、或いは神の使いの化身とされた伝承が、右の小郡隼鷹神社縁起に間接的にせよ影響を与えたことが想定される。尚、右の隼鷹神社縁起は昭和七年に記載された極新しいものだが、伝承的にはかなり以前からあったものと思われる。昭和七年に記された意味は後述する。

又別に、小郡市上岩田地区の老松神社にも神功皇后に関する伝承が残存しており、小郡市史によると次のようである。前掲の日本書紀の羽白熊鷲を討った後、神功皇后一行は、夜須野(現筑前町)から津古に出て、舟で宝満川を下り、老松宮のある神磐戸(上岩田の旧地名)に到着し、ここで武内宿禰に剣をまつらせたという。<sup>(18)</sup> また、当社の縁起によると、当社は上岩田、下岩田、井上三村の氏神で、延久二年(一〇七〇)岩田庄の領家菅原氏の創建と伝える。この岩田庄は、中世に筑後国御原郡に置かれた安楽寺(大宰府天満宮)領の荘園で、現岩田地区一帯に比定されている。吾妻鏡元久二年(一二〇五)五月二四日条によれば、大宰府安楽寺の社僧らの訴えにより、鎌倉幕府は「安楽寺領筑後国岩田嶋両庄」地頭職を安楽寺に付している。同書に「安楽寺領筑前国岩田庄」とあるのも当庄とされる。安楽寺(天満宮)の荘園であったことから、天満宮に列なる老松宮が勧請されたものと思われる。



尚、老松神社は福岡県を中心に点在するが、菅原道真左遷の時、手植えの松が生い茂る故に老松と称したといい、天満宮に列なる神社として天満宮とともに、各地の天満宮領に勧請されたものである。

そして、右に取り上げた小郡の御勢大霊石神社、隼鷹神社、上岩田老松神社とともに宝満川流域に位置し、それらの神社の神功皇后伝承はつながりを有していると思われる。

更に、小郡市史によると、市内神社の絵馬の中に神功皇后に関するものが散見する。御勢大霊石神社に文化六年（一八〇九）十一月作の三韓出兵と思われるもの、西島の竈門神社に年代不明の三韓出兵図、赤川の天満宮に明治一三年三月作の神功皇后と三韓出兵図、神功皇后と武内宿禰と題された絵馬が、小郡の祇園神社（年代不明）、干瀉の阿蘇神社（明治三八年八月作）、寺福童の福童神社（明治四〇年四月作）に見られる。<sup>(19)</sup>

前述の旧夜須郡（現筑前町三輪）の絵馬においてもそうであったように、小郡市の絵馬も明治期のものが中心で、それらは、明治期の征韓論や日清、日露戦争という対外政策により、古代の神功皇后新羅出兵が想起された現れと見なされる。<sup>(20)</sup> また、前掲の隼鷹神社において、神功皇后伝承が見直されて昭和七年に記録されたのも、昭和六年の満州事変などの軍国主義による対外侵略という時代状況と無縁ではあるまい。従って、神功皇后伝承は古代に留まらずに、中世、近世、そして近代に至るまで、土地の伝承と結び付きながら繰り返り語り続けられていたのである。

## 結

今までのことをまとめ、結論付けると次のようになる。古代の神功皇后伝承は、景行天皇と熊襲征討などにおいて交叉しつつ、卑弥呼や斉明天皇などをモデルとして生成されたが、神功皇后・応神天皇が八幡信仰と結び付いた

平安朝以降の中世、近世に至り、各地域の伝承を取り込んで神功皇后伝承は新たに展開する。筑後高良大社などは、古代の景行天皇などに代わり、神功皇后、八幡神が信仰の対象となり、筑前朝倉郡、夜須郡においては、地域による神功皇后紀の新たな解釈により、その伝承が生成して近代に至り、筑後小郡市周辺では、中世の戦いや神社の荘園化という地域の歴史を背景として、古代の伝承にない要素を取り入れ、中世、近世の人々の信仰に支えながら語り継がれて、近代にまで及んでいる。このように、神功皇后伝承は時代を越えて各地域に根ざして定着しているが、その一方で、新羅出兵という捏造された歴史の意味を古代の問題に閉じ込めておくのに留まらず、近代にまで関わる思想宗教的問題として改めて問い直すことも必要ではないかと思われる。<sup>(21)</sup>

#### 注

- (1) 熊襲と隼人の歴史的、地域的側面については、中村明蔵『隼人の研究』(平成五・九 丸山学芸図書)が詳しい。
- (2) 土蜘蛛に関しては、旧稿「神功皇后伝承―神功皇后と土蜘蛛・羽白熊鷹―」(『比較文化 福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要』二号 二〇〇五・三)で論じた。
- (3) 『日本歴史地名大系42 佐賀県の地名』(一九八〇・三 平凡社)による。
- (4) 高良玉垂命に対する諸説については、『式内社調査報告 二四巻 西海道』(昭和五三・三 皇學館大学出版部)の高良玉垂命神社の項の渡辺正気による解説が詳しい。
- (5) 『久留米市史 一巻』(昭和五六・三 久留米市史編纂委員会)五二―二ページによる。
- (6) 『日本歴史地名大系41 福岡県の地名』(二〇〇四・一〇 平凡社)による。
- (7) 『福岡県神社誌』(昭和一九・一 大日本神祇会福岡県支部編)
- (8) 貝原益軒編『筑前統風土記』(宝永六年 一七〇九成る 昭和六三・六 文献出版)、以下の引用、参照は同書による。
- (9) 美奈宜神社をめぐる江戸時代からの論争に関しては、前掲書(注4)の森弘子による当該神社の項の解説が詳しい。

- (10) 谷川健一編『日本の神々―神社と聖地1 九州』（一九八四・四 白水社）の美奈宜神社の項の佐々木哲也による解説。
- (11) 「砥上神社縁起」（『神道大系 神社編四十四 筑前・筑後・豊前・豊後』（昭和五七・一〇 神道大系編纂会）
- (12) 「三輪町史」（平成一三・四 三輪町教育委員会）八七一〜九ページによる。
- (13) 大保原合戦については『小郡市史 第二巻』（平成一五・六 小郡市史編集委員会）一一七〜一二七ページが詳しい。
- (14) 『神社縁起 日本思想大系』（一九七五・一二）による。
- (15) 「隼鷹神社縁起」（『小郡市史 第六巻』平成一四・五 六七四ページ）
- (16) 『八幡宇佐御託宣集』（昭和六一・一一 現代思潮社）による。
- (17) 八幡宇佐宮御託宣集に関しては、旧稿で論じた（『宗教実践の書『八幡宇佐宮御託宣集』』『祭儀と言説』一九九九・一二 森話社）。
- (18) 『小郡市史 第三巻』（平成一〇・一一）六一二〜三ページによる。
- (19) 前掲書（注15）七八三〜八〇七ページによる。
- (20) 明治の時代状況と神功皇后絵馬については、リチャード・W・アンダーソン（亀井好恵訳）「征韓論と神功皇后絵馬―幕末から明治初期の西南日本―」（『列島の文化史10』一九九六 日本エディタースクール出版部）が考察している。
- (21) 神功皇后新羅出兵伝承が近代に関わる思想宗教的問題でもあることは、いずれ別稿で改めて論じるつもりである。